mongɾol(モンゴル)の漢字転写「忙ᵗ豁ᵐᵇ」をめぐって

中村雅之

蒙古文語の mongɾol(モンゴル) に対応する語は『元朝秘史』では「忙ᵗ豁ᵐᵇ」と綴られ、甲種『華夷訳語』では「忙ᵀ豁」と綴られる。mongɾol-un(モンゴルの) に対しては双方とも「忙ᵗ豁侖」である。問題は「忙」の部分にある。『蒙古字韻』では「忙」の属する音節はパスパ字でmaŋ と表記されている。そして『華夷訳語』の「忙吉児」（薤）、『元朝秘史』の「忙吉児速你牙児」（薤教）、「忙吉児速阿児」（薤教）などは、現代諸方言から見て manggir-を表記したものと考えられる。それならば mongɾol の mong に「忙」があてられているのはなぜか。服部氏の考えは次のようなものである。

mongɾol の mong は現代諸方言の比較から、13～14世紀においても広い円唇母音[ɔ]を持っていたと考えられる。また、当時の蒙古語には mong のほかに m-ng タイプの類似の音節として、mang/möng/mung があった。一方、それに近い音を表わす漢字としては「忙」と「蒙パスパ字ではmuŋ」（およびそれらと同音の字）の二種類しかなかった。そこで、音訳者は mang と mong を 「忙」で、möng と mung を「蒙」で転写するのを適当と認めた。

以上が服部氏の説明の要約である。非常に明快な解釈であり、反論の余地はなさそうである。ここでは服部氏の解釈の補説として、以下の二点について考えてみたい。

(1)服部氏の解釈が正しければ、mong 以外に dong/long など他の音節にも同様の状況が生じうるわけであるが、実際の状況はどうか。

(2)蒙古語の音節 mang と mong に対して区別なく「忙」をあてているわけだが、maɾ と moɾ の場合には「馬ᵐᵃ」と「秣ᵐᵒ」で完全に区別をしている。同様の方法で -ng の部分に小漢字による符号をあてることがなぜできなかったのか。

まずは(1)から。『元朝秘史』（元）と『華夷訳語』（華）から-ang/-ong/-öng/-ung/-üng を含む音節を拾ってみると次のようなものがある。漢字表記の後のローマナイズと文語形はモスタールト(1977)による。（モ氏にないものは＊を付す）

忙吉児manggir（薤）文語manggir ［華］	昂吉荅anggida（外）文語anggida［華］
忙ᵗ豁ᵐᵇmongqol（達達）文語mongɾol[元]	汪昆ongɾun（神）文語ongɾon［華］
蒙客*möngke（長生）文語*möngke ［元］服部	汪哥önggö（色）文語öngge ［華］
蒙ᵗ合ᵐᵃmungqaq（愚）文語mungqaɾ ［元・華］	翁石ungši（読）文語ungsi- ［華］

ᵖ康ᵖ罕*qangGan（教足）－	[元]	常čang（鑼）文語čang	[華]
匡豁qongqo←qongho（杵）文語qongqo	[華]	ᵖ晃ᵖ豁児*qongGor(黄馬)東林qongγur	[元]
匡干könggen（軽）文語könggen	[華]	——	
——		統ᵖ合- tungqa-(発来)文語tungγa-	[華]
孔客-*küngke-（離的遠）－	[元]	——	

資料に限りがあるので必ずしも均整のとれた表になっていないが、大ざっぱな傾向として次のような対応が予想される。

	＜摂＞	＜蒙古字韻＞	＜m－＞
蒙古語ａｎｇ	宕江摂開口	aŋ	忙 maŋ
蒙古語ｏｎｇ[ɔŋ]	宕江摂合口	ů aŋ	忙 maŋ
蒙古語ö ｎｇ	宕江摂合口	ů aŋ	蒙 muŋ
蒙古語ｕｎｇ	通摂	uŋ	蒙 muŋ
蒙古語ü ｎｇ	通摂	uŋ	（蒙）

すなわち、蒙古語の ong～öng は宕江摂合口で表記されるのが普通だが、唇音には開口と合口の対立がないので、上に見るような一見例外的な対応ができあがったと推測できる。もしこの推測が正しければ、開口と合口の対立をもたない他の音節（舌頭音、来母など）でも「忙～蒙」の場合と同様の状況が生じると考えられる。以下、特に d- と l- の場合を確認することにする。

「音を出す／声を発する」の意の語根（文語形 dongγod-）は各資料で次のように表記されている。

①多汪ᵖ豁楊 *do' ongGod-(作声)[元]　ローマ字表記は小沢索引による。

②董ᵖ豁楊 *dungGod-(作声)[元]　同上

③騰吉ᵗᵉ里董ᵖ豁敦 tenggiri·dungqodun(雷)[華]　モ氏による。

④蕩郭都 *danggodu(雷)[至元訳語]　ローマ字表記は長田による。

表記はまちまちである。①と②は同じ『元朝秘史』の中でも表記が一定していなかったことを示している。特に①は［dɔŋ］という音を何とか表記しようという試みがうかがえて興味深い。同様の表記は「選ぶ」の意の語根（文語形 songγu-）にも見える。

⑤莎汪ᵖ忽 *soongGu-(選揀)[元]　表記は小沢による。

⑥莎汪ᵖ古 *so' ongγu(択)[華]　モ氏による。

①のような方式によらずに一つの漢字で蒙古語の dong を表記しようとすれば、②③の

ように「董」を用いるか、④のように「蕩」を用いるよりほかに方法がない。これはちょうど上に述べた mong の場合と同様の問題である。ただし、②のように通摂の字「董」で dong を表記している点が「忙 mong」の場合とは異なる。ちなみに、蒙古語 dung に対しては次のとおりで通例に合っている。

⑦不東中忽 budungqu-(暗)文語budungγui[華] モ氏による。

次に long の場合を見てみよう。

⑧籠中合 lungqa(瓶)文語longqo[華] モ氏による。

⑨莎舌郎哈 sorangha → solangqa(虹)文語solongγa[華] モ氏による。「舌」はおそらく衍字。

蒙古語の long[lɔŋ] を表記するのに、⑧では通摂の「籠」を用い、⑨では宕摂の「郎」を用いている。⑨の類例として rong の例を挙げておく。

⑩斡舌郎中合 orangqa(旗)文語orongγa[華]

以上をまとめると、次のようになる。

i) 文語で -ong という綴りをもつ音節は中期蒙古語においても現代のハルハ方言やチャハル方言のように [-ɔŋ] という音であったらしい。

ii) その音を漢字で表記するには、

a. 宕江摂の合口字があればそれを用い、なければ

b. 宕江摂の開口字か

c. 通摂の字、もしくは

d. 分解して二字を用いる。

服部氏が論じた「忙」の用例は上の「ii-b」の場合に相当するわけである。

こんどは(2)の問題に移ろう。

『元朝秘史』や『華夷訳語』における音節末の子音の表記法については小沢(1994:191頁以下)に詳しい。そこには-b, -č, -d などの子音のみを小漢字で表記する方法があることが述べられているが、-ng のみを表記する小漢字はない。なぜか。それはおそらく ng[ŋ] を声母に持つ字が当時の漢字音転写の基礎となった言語にはすでに存在しなかったからであろう。つまり疑母はすでにゼロ声母になっていたと考えられる。このことは疑母の字を用いた次のような転写法からも確認できる。

額薛 ese- (〜でない)／ 兀魯思 ulus (人々、国)／ 牙速 yasu (骨)

-ng を表わす小漢字が用いられないという事実は、当時 ng 声母を持つ字がひとつとして

存在しなかったであろうという推測を可能にする点で重要である。『中原音韻』(1324)の表わす体系を再構成する場合、疑母に関しては部分的に ng 声母が存在していると考えるのが普通である［cf. 楊耐思(1981:27-29頁)］。これにはパスパ字表記の影響が大きい。パスパ字では「ŋ」で転写される字母を持つ音節がかなりあるからである。しかし外見上の表記と実際の音価とは一応切り離して考えなければならない。『蒙古字韻』などのパスパ字表記では疑母と喩母は音韻的に対立していない。まして喩母の「有」「右」が ŋ iw と表記されているのを知れば、パスパ字の ŋ が実際にはゼロ声母であったと考えることはそれほど無理なことではない。『至元訳語』においても疑母字はすべてゼロ子音の音節に用いられている。五u/ 臥o/ 兀u/ 昂ang/ 玉yu/ 牙ya など。

『中原音韻』の前後に位置する『元朝秘史』『華夷訳語』『至元訳語』『蒙古字韻』などがすべて『中原音韻』と同一の言語を基礎にしているという保証はないが、少なくともそれらの資料の中にはいずれにも ŋ 声母の存在を想定すべき積極的な材料はないようである。ただし、『中原音韻』それ自体の中には、わずかながら ŋ 声母の存在を示唆する箇所がある。蕭豪韻の「傲」（疑母）と「奥」（影母）の対立などであるが、これらがŋ声母の存在を証するものであるかどうかはにわかには判断しがたい。13～14世紀の音韻資料全体の中で考えるならば、非常に例外的なものと言うべきで、むしろ音声以外の理由によって見かけ上の対立例が生じた可能性を探ってみる必要があるのではなかろうか。

（小文は第3回対音対訳資料研究会（1995.3.20 富山大学）での発表原稿をそのまま転載したものである。）

＜文献＞

服部四郎(1941):「Mongol か Mangol か」『東方学報』第12巻2号。『服部四郎論文集』第2巻（三省堂1987）に収録。

A. Mostaert(1977):《Le matériel mongol du Houa I I Iu 華夷訳語 de houng-ou(1389)》 *Mélanges chinois et bouddhiques* XVI, Bruxelles.

小沢重男(1993):『元朝秘史蒙古語文法講義』東京：風間書房。

(1994):『元朝秘史』岩波新書。

長田夏樹(1953):「元代の中・蒙対訳語彙『至元訳語』」『神戸外大論叢』第4巻第2・3号

栗林均(1989):「モンゴル系諸言語対照基本語彙」『言語文化接触に関する研究』第1号。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

楊耐思(1981):『中原音韻音系』北京：中国社会科学出版社。

石田幹之助(1973):「至元訳語について」『東亜文化史叢考』東京：東洋文庫。もと1934。